

現代日本ファッションデザインの研究  
Research on Japanese Contemporary Fashion Design

高木 陽子\*1<sup>+</sup>, 成実 弘至\*2<sup>+</sup>, 西谷 真理子\*3<sup>+</sup>, 堀 元彰\*4<sup>+</sup>  
Yoko Takagi\*1<sup>+</sup>, Hiroshi Narumi\*2<sup>+</sup>, Mariko Nishitani\*3<sup>+</sup>, and Motoaki Hori\*4<sup>+</sup>

\*1 文化女子大学 文化ファッション研究機構

東京都渋谷区代々木 3-22-1

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University,

3-22-1 Yoyogi, Shibuya-ku, Tokyo, Japan

\*2 京都造形芸術大学芸術学部

Department of Art, Kyoto University of Art and Design

\*3 文化出版局

Bunka Publishing Bureau

\*4 東京オペラシティアートギャラリー

Tokyo Opera City Art Gallery

<sup>+</sup>服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract : A three year multidisciplinary research project on Tokyo Fashion is concluding this year with an exhibition on contemporary Tokyo fashion design from a sociological, editor's and art historians view in dialogue with designers symbolizing Tokyo fashion today.

In the 1980s, both Tokyo and Antwerp were the cradles of cutting-edge fashion taking the lead in changing the Fashion System. The exhibition "6+ Antwerp Fashion" at the Tokyo Opera City Art Gallery (11 April-28 June, 2009), compared fashion from the two cities. The first generation of Antwerp designers were influenced by Tokyo Fashion, especially after the visit to Osaka and Tokyo in 84 and 85, which were important landmarks in the birth of the "Antwerp 6" in 1986. The results of our first year's research are published in the exhibition catalogue and in SOEN (pp.26-49, May, 2009).

The second year, we organized a symposium "Talking on Antwerp Fashion" on April 11, 2009, as a main event for the "6+ Antwerp Fashion" exhibition. Geert Bruloot, promoter of the first generation of Antwerp designers, Hirofumi Kurino, buyer and Keiko Hirayama, journalist both knowledgeable on the reception of Antwerp Fashion to Japan participated as well as Akira Naka, Mikio Sakabe, Yuima Nakazato, three Japanese graduates from the Fashion Department of the Antwerp Royal Academy of Art.

---

\*1) takagi@bunka.ac.jp

Now we focus on analyzing Tokyo fashion in the 21st century in preparation of an exhibition showing at the Tokyo Opera City Art Gallery (18 Nov.-25 Dec. 2011) and the Kobe Fashion Museum (14 Jan. - 1 Apr. 2012).

Simultaneously in 2010, two important museums abroad organized exhibitions focusing on contemporary Japanese fashion, proving it to be globally a hot topic. “Future Beauty: 30 Years of Japanese Fashion “at the Barbican Art Gallery in London narrates Japanese Fashion as the “big three,” Issey Miyake, Comme des Garçon and Yohji Yamamoto, and the followers.” Japan Fashion Now” exhibition at the Museum of the Fashion Institute of Technology, New York shows Tokyo as a wonderland of Gothic-Lolita, street fashion and up-and-coming brands.

The aim of our exhibition is to extract the reality of fashion in Tokyo where fashion is one of various cultural elements. We select independent brands that best symbolize Tokyo fashion, keeping distance from trends, realizing problems of contemporary fashion and not only making clothes but also being active in cross-cultural exchange. The exhibition will demonstrate structure of contemporary Tokyo fashion design through installations and videos by these brands. The catalogue will record the dialogue between designers and members of this research group.

要旨： 社会学・美術史学の研究者とファッション編集者が結成した本研究グループは、東京のファッション動態に関する3年間の共同研究の結果を、本年秋、今日の東京ファッションを象徴するデザイナーたちとのダイアログを結実させた現代東京のファッションデザイン展で発表する。

1980年代に、東京とアントワープは、ファッションの前衛の揺籃の地であり、ファッションシステムを変貌させる契機をつくった。東京オペラシティアートギャラリーにおける「6+アントワープ・ファッション」展（2009年4月11日—6月28日）を準備していた本研究チームは、ポストモダンのファッションを代表する両都市を比較し、現代日本ファッションの特質を探った。アントワープの第一世代のデザイナーたちは、1986年の「アントワープの6人」誕生の直前、1894年に大阪、1895年に東京を訪問し、特に東京のファッションクリエーションとビジネスに影響を受けていたことが明らかになった。詳細は、展覧会カタログと『装苑』5月号に発表した。

平成21年度、「6+アントワープ・ファッション」展の関連行事としてシンポジウム「アントワープを語る」を開催した。ゲストには、アントワープの第一世代デザイナーを世に出したヒュールト・ブリュロート、アントワープ・ファッションの日本への受容の当事者・目撃者バイヤーの栗野宏文とジャーナリストの平山景子、アントワープ王立美術アカデミー・ファッション科の日本人卒業生、坂部三樹郎、中章、中里唯馬を迎えた。

現在は、21世紀の東京ファッションの特質分析に集中し、その成果を社会に還元するため展覧会（2011年10月18日—12月25日東京オペラシティアートギャラリー、2012年1月14日—4月1日神戸ファッション美術館）の準備をおこなっている。

2010年には、海外の重要な二つの美術館が同時に現代日本ファッションに関する展覧会を開催し、このテーマが世界的に重要度を増していることが明らかになった。ロンドンのバービカン・アートギャラリーの「日本ファッション30年展」では、1980年代に世界の舞台に登場した三宅一生（ISSEY MIYAKE）、山本耀司（ヨウジヤマモト）、川久保玲（コム・デ・ギャルソン）とその

後継者たちによる日本ファッションの30年史が語られた。ニューヨークのファッション工科大学附属美術館の「現在の日本ファッション」展では、東京をゴシックロリータ、ストリートファッション、そしてつぎつぎに現れるブランドが入り混じったワンダーランドとして展示している。

本研究グループが目指すのは、様々な文化のひとつとしてファッションがある東京のリアリティーを抽出・展示する展覧会である。流行から距離をおき、現在のファッションの問題を意識しており、単なる服作りだけでなく、異なるジャンルのカルチャーとの交流を展開しているブランドを選び、東京ファッションを象徴させる。展覧会場における映像やインスタレーションによって、現代の東京におけるファッションデザインの構造を立体的に分析し、一般に公開したい。また、デザイナーと研究メンバーとのダイアログを展覧会図録に掲載する。

### 配当決定額

平成 20 年度	560,000 円
平成 21 年度	1,400,000 円
平成 22 年度	1,150,000 円
合計	3,110,000 円

### 研究の目的

本共同研究メンバーは、オペラシティアートギャラリーにおける初めてのファッション展「6 + アントワープ・ファッション」展の図録の編集・翻訳に集まった美術史と文化社会学の研究者と、ファッション編集者、美術館学芸員である。80年代のアントワープ・ファッションの誕生が、ファッションシステムの中心地域から見れば辺境に位置し、いかなるファッションの伝統も持たなかった同時代の日本からのインパクトに支えられていた事実が、本研究チーム結成のきっかけとなった。現代日本の主要な文化資源として、マンガ・アニメ・映画とならびファッションが挙げられているにもかかわらず、アカデミックな研究が遅れている現状に危機感を共有し、本研究がスタートしたのであった。

1970年代から80年代にかけて、三宅一生 (ISSEY MIYAKE)、山本耀司 (ヨウジヤマモト)、川久保玲 (コム・デ・ギャルソン) が相次いで世界の舞台に登場し、日本のファッションは一躍世界的に広く知られるようになった。日本では、この“御三家”に刺激を受けて、デザイナーズブランドが続々と登場し、ファッションが花開くバブリーな80年代に対して、90年代には、セレクトショップを通して、海外の新しい個性派ブランドが紹介される一方、“裏原”と呼ばれるストリート系カジュアルやギャル系ブランドが注目されるなど、ファッションのセグメント化が急速に進んだ。さらに90年代後半から2000年代にかけて、海外の高級ブランドの直営店が次々にオープンする一方、編集型のコンセプトショップが登場し、安価でトレンドを楽しめるファストファッションが人気を集めるようになった。

21世紀になり、パリ、ニューヨーク、ミラノが発信するハイファッションが輝きを失い、ストリートやファストファッションが影響力をもち、環境問題への意識が高まる現在、ファッションは、20世紀後半とは別のステージに来ている。2010年から2011年にかけて、海外で現代日本ファッション展がひき続いて開催される理由は、東京がその先端都市であることを示しているだろ

う。

本研究は、グラフィックや音楽などのサブカルチャーと結びつきながら新しい展開を見せている現代日本のファッションデザインを、きわめて創造性に富んだ文化現象としてとらえ、日本のデザイナーたちが提示するファッションデザインの新しいあり方を検証する。

## 研究の方法

現代のファッション動態調査には、多様な専門領域からのアプローチが必要とされる。本研究では、美術史・社会学の研究者に、キュレーター、編集者といったファッション文化媒介者を交えて研究チームを結成した。ファッション批評が成熟していない日本において、現代ファッション動態を分析するには、デザイナーのアーカイブ資料調査、デザイナー、プロモーター、バイヤー、ジャーナリストへの聞き取り調査が主たる方法となる。

最終的には、多様なカルチャーのひとつとして服がある東京のファッションデザインのリアリティーを、展覧会の形式で、デザイナーの過去の作品の陳列ではなく映像やインスタレーションによって立体的に展示する。展覧会カタログには、デザイナーと共同研究者のダイアログを掲載する。

## 研究の実施計画

[20年度]

- 1、「6+アントワープ・ファッション」展（平成21年4月11日—6月28日、主催：東京オペラシティアートギャラリー、共催：文化学園・文化女子大学、協力：アントワープ州立モード美術館）の図録編集のためアントワープと東京のファッションの特性を比較研究する。
- 2、「6+アントワープ・ファッション」展の関連企画シンポジウム「アントワープを語る」を企画。その準備のための会議、関係者の聞き取り調査をおこなう。

[21年度]

- 1、シンポジウム「アントワープを語る」の企画運営。  
（平成21年4月11日 14:00-16:00 於：東京オペラシティ。）
- 2、現代東京ファッションデザインの分析手法の検討をおこなう。
- 3、海外のファッション産業の拠点における日本ファッション評価を調査分析する。

[22年度]

- 1、ファッションデザイナーおよび関係者の聞き取り調査を行う。
- 2、ニューヨーク、パリ、ロンドンにおける現代日本ファッション展を視察する。
- 3、シンポジウム「美術館におけるファッション展再考」企画運営。  
（1月21日（金）15:00-18:00、於：文化ファッション研究機構）。
- 4、本研究の最終成果発表「現代東京ファッション展（仮題）」及び図録の編集。

## 研究の成果

[20年度]

- 1、研究会を4回開催した。  
第1回（11月28日）：本年度の研究の進め方について。  
第2回（12月12日）：「6+アントワープ・ファッション」展関連企画立案。

第3回（1月17日）：アントワープ・ファッションを日本に紹介したジャーナリスト平川武治氏の聞き取り調査。

第4回（3月23日）：アントワープ王立美術アカデミーで学んだ日本人デザイナー（坂部三樹朗、中章、中里唯馬）の東京ファッションウィークにおける展示とショーを視察。

- 2、「6+アントワープ・ファッション」展図録の翻訳、校閲、テキスト執筆等の編集。[1, 5]
- 3、アントワープにて約25人のファッション関係者にインタビューを試み、『装苑』5月号の特集「アントワープはなぜ、モードを生むのか？ファッションと教育、そして日本」を執筆した。[4]

[21年度]

- 1、研究会を6回開催した。

第1回（4月11日）本年度の研究の進め方について。

第2回（5月29日）文化女子大学紀要共同執筆について。

第3回（10月24日）研究法の検討。

第4回（12月13, 14日）京都国立近代美術館河本信治氏、神戸ファッション美術館百々徹氏聞き取り調査。

第5回（2月23日）資料収集整理。

第6回（3月24日）資料収集整理。

- 2、「6+アントワープ・ファッション」展オープニングトーク「アントワープを語る」運営。

主催：（財）東京オペラシティ文化財団、服飾文化研究共同拠点「現代日本ファッションデザインの研究」4月11日（土）14:00-16:00、於東京オペラシティ [2, 6]

第1部「アントワープ/ファッションの揺籃期」

コーディネーター：高木陽子      ゲスト：ヒュールト・ブリュロート、

第2部「アカデミーのカリキュラム」

コーディネーター：成実弘至      ゲスト：坂部三樹郎、中章、中里唯馬

第3部「日本における受容」

コーディネーター：西谷真理子      ゲスト：栗野宏文、平山景子



Figs. 1, 2, 3 Symposium “Talking on Antwerp Fashion” シンポジウム「アントワープを語る」



Figs. 4, 5, 6 Exhibition “6+ Antwerp Fashion” 「6 +アントワープ・ファッション」 展会場

### 3、ロンドン、パリにおける現代日本ファッションデザイン評価視察・聞き取り調査。

[22年度]

#### 1、研究会を7回開催。

- 第1回（5月11日）本年度の研究の進め方について。
- 第2回（6月11日）ミントデザインズ、トーガ聞き取り調査。
- 第3回（7月9日）h. NAOTO、シアタープロダクツ聞き取り調査。
- 第4回（10月16日）展覧会コンセプトについて
- 第5回（1月21日）展覧会コンセプトについて
- 第6回（2月8日）建築家中村竜治氏による展覧会会場構成について。
- 第7回（3月4日）展覧会場構成、報告書としての図録編集。

#### 2、現代日本ファッション関連展視察

- ・FIT 美術館（ニューヨーク）“Japan Fashion Now” 展
- ・バービカン・アートギャラリー（ロンドン）“Future Beauty: 30 Years of Japanese Fashion” 展
- ・パリ装飾美術館 “Les années 1990–2000. Histoire idéale de la mode contemporaine vol. II” 展

#### 3、分担して現代日本を象徴するデザイナーの聞き取り調査を行った。

#### 4、シンポジウム「美術館におけるファッション展再考」開催

日時：平成23年1月21日（金）15:00–18:00  
 場所：文化女子大学文化ファッション研究機構共同研究室（F48）  
 主催：服飾文化共同研究拠点「現代日本ファッションデザインの研究」  
 司会：堀元彰

[発表者]

##### 1. 高木陽子

「問題提起：バービカン・アートギャラリー “Future Beauty: 30 Years of Japanese Fashion” 展を視察して」

##### 2. 西谷真理子

「FIT 美術館 “Japan Fashion Now” 展を視察して」

##### 3. 成実弘至

「展覧会関連企画を考える：“Japan Fashion Now”展シンポジウムに参加して」

4. 保坂健二郎

「現代建築を美術館で展示すること」

[ディスカッション参加ブランド]

1. アンリアレイジ/ANREALAGE (森永邦彦)
2. エイチナオト/h. NAOTO (廣岡直人)
3. ケイスケカンダ/keisuke kanda (神田恵介)
4. マトフ/matohu (堀畑裕之・関口真希子)
5. ミナペルホネン/minä perhonen (皆川明)
6. ミントデザインズ/mint designs (勝井北斗・八木奈央)
7. サスクワッチファブリックス/SASQUATCHfabrix  
(Wonder Worker Guerrilla Band/横山大介・荒木克記)
8. シアタープロダクツ/THEATRE PRODUCTS (武内昭・中西妙佳・金森香)
9. リトゥンアフターワーズ/writtenafterwards (山縣良和)



Fig.7 Symposium “Reconsidering Fashion Exhibitions at Museums”  
シンポジウム「美術館におけるファッション展再考」

4、「現代日本ファッション（仮題）」展開催準備、カタログ編集

会期・会場：

2011年10月18日（火）～12月25日（日）東京オペラシティ アートギャラリー

2012年1月14日（土）～4月1日（日）神戸ファッション美術館

主催：

公益財団法人東京オペラシティ文化財団、  
文化学園・文化学園大学 文化ファッション研究機構  
神戸ファッション美術館（神戸展のみ）

## 主な発表論文等

### [論文]

1. 高木陽子「日本からみたアントワープ」『6 + アントワープ・ファッション』展図録、pp. 30-37、アントワープ、リュディオン(2009)
2. 高木陽子、成実弘至、西谷真理子、堀元彰「アントワープ・ファッションを日本から検証する」『文化女子大学紀要 服装学・造形学研究』第41集, pp. 35-46(2010)

### [著書]

3. 成実弘至「デザイン創造都市—京都ブランドに見るもの作りの可能性」松井利夫・上村博編『芸術環境を育てるために』角川学芸出版、pp. 238-257(2010)

### [雑誌新聞記事]

4. 高木陽子「アントワープはなぜファッションを生むか？ファッションと教育、そして日本」『装苑』5月号, pp. 26-49 (2009)

### [図録]

5. 高木陽子・東京オペラシティ編『6 + アントワープ・ファッション』展図録、カート・デボ、カロリーヌ・エヴァンス、キャシー・ホーン、高木陽子、バーバラ・ヴィンケン(エッセイ)、高木陽子、成実弘至、平芳裕子、蘆田裕史(翻訳)、西谷真理子(校閲)、アントワープ、リュディオン(2009)

### [シンポジウム]

6. 高木陽子、成実弘至、西谷真理子、堀元彰「アントワープを語る」2009年4月11日 於：東京オペラシティアートギャラリー、<http://www.operacity.jp/ag/exh105/j/talk.html>

### [口頭発表]

7. 成実弘至「現代日本のファッション文化—歴史と現在の交差点—」東アジア 芸術文化研究所 2010 シンポジウム《東アジアの女性風俗と芸術》、2010年9月16日、於：弘益大学校(韓国)